



吹田市

文化財ニュース

No.23

平成14年3月29日

〒564-0001

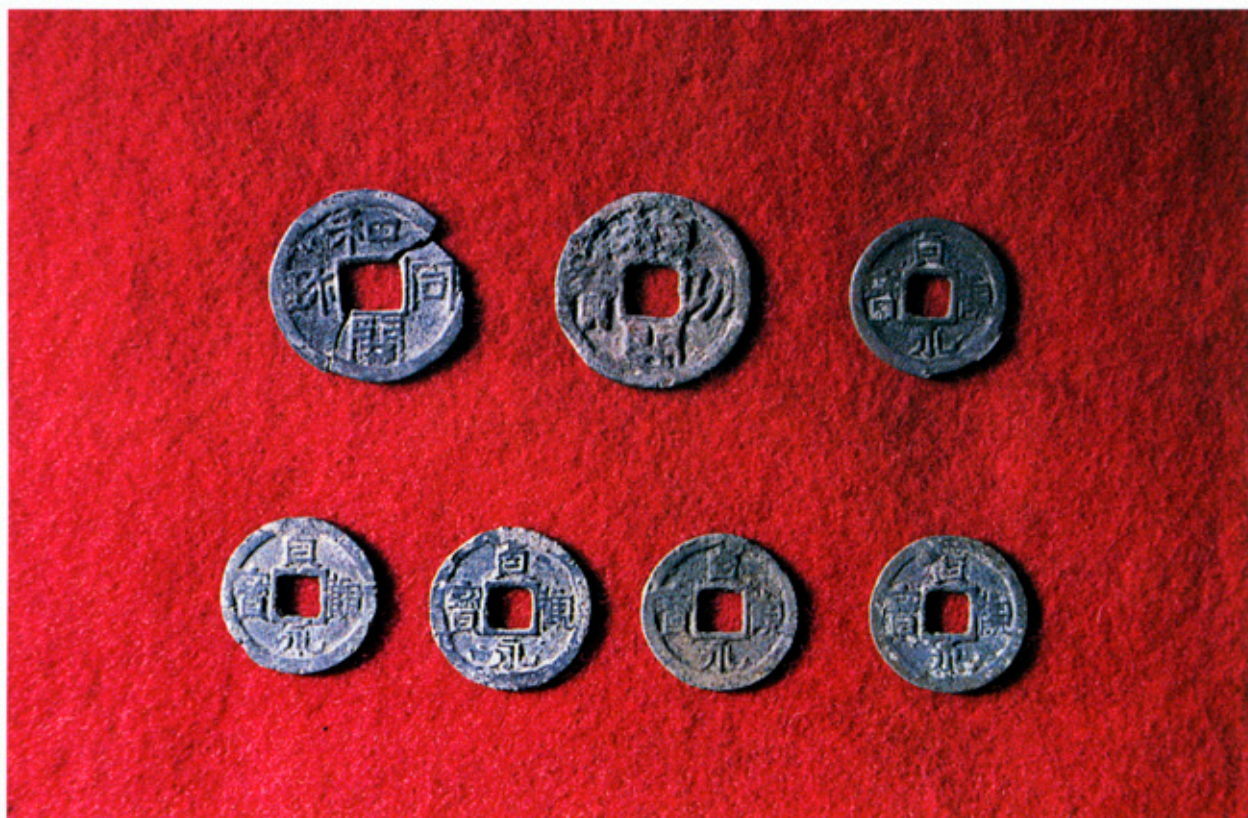
吹田市岸部北4丁目10番1号

吹田市立博物館

TEL.(06)6338-5500

FAX.(06)6338-9886

榎坂遺跡で古代銭貨が出土!



▲出土銭貨（上段左：和同開珎、上段中央：神功開寶、上段右および下段：貞観永寶）

平成13年6月から8月にかけて榎坂遺跡において発掘調査を実施し、平安時代から室町時代を中心とした遺構・遺物を検出することができました。

ここでは、皇朝十二銭のうち、和同開珎・神功開寶・貞観永寶の3種類の銭貨のほか、緑釉陶器や青磁、白磁、また瓦など、榎坂遺跡の性格を考える上で興味深い資料が数多く検出されました。（詳しくは4・5頁へ）



▲現地説明会風景

平成13年度の主な文化財保存事業



▲千里寺近景(北東から)

吹田市では、埋蔵文化財をはじめ各種文化財について、調査や保護を行っています。

その中でも、今年度特筆されることとして、千里山西1丁目に所在する千里寺本堂が、文化財保護法の規定に基づき、平成14年2月14日付けをもって国の文化財登録原簿に登録されました。吹田市におきましては、初めての登録有形文化財となります。

埋蔵文化財の調査は、昨年度末に実施しました吉志部瓦窯跡工房跡・垂水南遺跡57次調査に引き続き、今年度は土地区画整理事業に伴う榎坂遺跡3次調査・高城遺跡2件・高畑遺跡・朝日町遺跡において発掘調査を実施しました。その他、埋蔵文化財包蔵地及びその周辺地などにおいて、36件の試掘調査、65件の立会、さらには分布調査等を実施しました。(2月末日現在)

垂水南遺跡では、古墳時代後期に営まれたと推定される護岸施設がみつかりました。こ

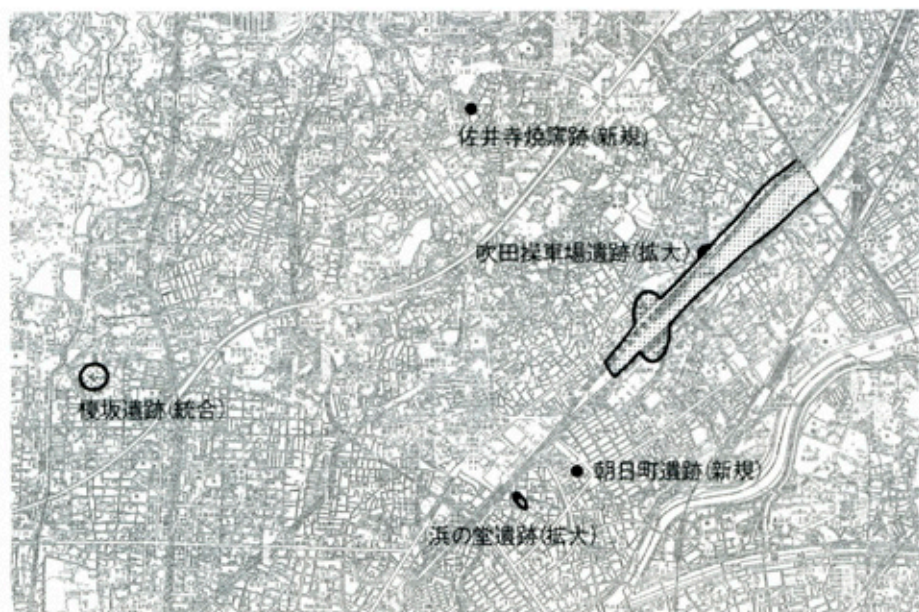
の護岸施設は、杭に横木を渡して固定した木組みに粘土等を被せた構造で、多くの遺物が出土しました。

高畑遺跡では、土師器・須恵器とともに、ピット2基を確認しました。出土遺物から古墳時代のものと考えられます。

そして、これらの調査により、平成12年度末～13年度において、佐井寺焼窯跡・朝日町遺跡が新規に発見された他、吹田操車場遺跡・浜の堂遺跡の範囲拡大、榎坂遺跡及び榎坂遺跡B地点の統合がありました。今後これらの地域については、

埋蔵文化財の保護についてご協力いただくこととなります。

埋蔵文化財以外の文化財事業としては、吹田市内に所在する文化財の調査を行うとともに、文化財保護条例によって指定並びに登録された文化財を保護していくために、市より補助金を交付しています。今年度は、重要文化財吉志部神社防災設備に対して補助金を交付するとともに、本市指定有形民俗文化財では「西奥町地車」防災工事・「神境町地車」防災工事・「六地藏地車」保存修理に対して、本市登録地域無形民



▲新たに発見された遺跡 (S=1/50000)



▲入口から展示会場を臨む

民俗文化財では「山田伊射奈岐神社太鼓神輿」・「泉殿宮神楽獅子」・「権六おどり」に対して補助金の交付を行いました。

また、文化財調査については、市内に残されていた古民家等の建築物について、所有者のご協力を得て記録した他、吹田郷土史研究会と大阪府文化財愛護推進委員に委託して、市域内の梵鐘の所在とその銘文について調査を行いました。さらに、天然記念物の生息状況を把握するため、NPO法人すいた市民環境会議に委託し、調査を行いました。

この他、博物館においては、特別展や特別陳列などの企画展示が開館以来毎年行われていますが、市民の皆様により市内の文化財への関心を高めていただき、さらには文化財の保護が促進されることを期して、新たに『土の中からコンニチハ』と題して、「平成13年度埋蔵文化財発掘調査成果展」を開催し、あわせて毎年3月に行ってこられた「歴史講演会」を成果展会期中に開催いたしました。

平成13年度埋蔵文化財発掘調査成果展『土の中からコンニ

チハ』は、平成13年8月4日（土）～9月2日（日）の間に行い、弥生時代後期から古墳時代にかけての垂水・江坂地域の遺跡、平成12年度に実施しました発掘調査の成果を中心に紹介しました。

弥生時代後期～古墳時代の垂水・江坂地域の遺跡としては、銅鏡の出土で注目を集め、さらに水銀朱の付着した土器を多量に出土した垂水遺跡（24次）、製鉄関連遺構が見つかった垂水南遺跡（48次）、古墳時代の柱穴や井戸が見つかった榎坂遺跡B地点について紹介し、平成12年度発掘調査成果としては、吉志部瓦窯跡工房跡、土地区画整理事業に伴う榎坂遺跡試掘調査、護岸施設が見つかった垂

水南遺跡（57次）について紹介しました。また、発掘調査や出土資料等を整理する内業調査の様子を写真パネルや道具の展示をとおして紹介しました。

歴史講演会については、今年度は8月26日（日）に、芦屋市教育委員会森岡秀人氏を講師に迎え、『邪馬台国時代の摂津-ヒト・モノ・ムラの動きから-』と題して、弥生時代後期～古墳時代の摂津地域における社会や土器の変化などについて語っていただきました。また、博物館文化財担当職員による近年の発掘調査成果報告も併せて行いました。



▲展示風景（垂水遺跡出土の土器）

榎坂遺跡第3次発掘調査の概要

榎坂遺跡は、江坂町3丁目一帯に広がる弥生時代から室町時代にかけての集落遺跡です。これまでの発掘調査では、中世の耕作関連の遺構や、弥生～古墳時代の柱穴や井戸などの遺構が確認されています。

今回の発掘調査は、土地区画整理事業に伴い実施したもので、平成13年6月15日から8月1日にかけて約2m×55mの調査区を設けて行いました。その結果、主に平安～室町時代にかけての遺物とともに、3面の遺構面を検出することができました。以下、各遺構面の状況をまとめてみます。

[第1面]

主に鎌倉～室町時代のもと考えられる遺構・遺物が検出されました。遺構には、農作業に伴うとみられる溝のほか、井戸や土坑などが検出されました。そして井戸内においては、井戸枠として曲物を認めることができました。さらに、検出部分で径約2mを測る大型の土坑が検出されました。この土坑については、井戸か流水路の一部ではないかと考えられます。そして、土坑内からは、弥生時代から鎌倉時代にかけての遺物が数多く検出されました。

[第2面]

主に平安末～鎌倉時代のもと考えられる遺構・遺物が検出されました。ここでは、南北・東西方向にのびる溝が多数認められました。そして、調査区の東側においては、東西方向にのびる幅1.2mを測る大型の溝が検出されました。これらの溝は、榎坂遺跡付近一帯で認められる



井戸(第3面)



井戸(第1面)



大型溝(第2面)

豊嶋郡条里の区画方位と一致することから、おそらく、当時の農業活動の中で形成されたものと考えられます。

[第3面]

主に平安時代中頃のもと考えられる遺構・遺物が検出されました。遺構には、溝や柱穴、井戸などがありましたが、検出された2基の井戸においては井戸枠が残存していました。その内の1基においては、板を立てた木組みの中に曲物をすえた状況が確認されました。この他、調査区西側においては、東西方向にのびる幅約1mの大型の溝が検出されました。この溝からは、和同開珎・神功開寶・貞観永寶などの皇朝十二銭といわれる銭貨や瓦、緑釉陶器、また牛・馬の骨などが検出され、その内容からすると、この溝は、第2面で検出された農耕に伴う溝とは性格が異なるものではないかと考えられます。

以上のような状況で遺構・遺物を確認することができました。ここでもう少し出土遺物について述べますと、鎌倉～室町時代の遺物につき

ましては、土師器皿や瓦器椀などの日常の雑器が主体を占めていました。また、平安時代の遺物についても日常雑器が多くありました。しかし、ここでは緑釉陶器や灰釉陶器、中国製の白磁や青磁が比較的多く認められました。そして、先に述べましたように、第3面検出の大溝内からは、銭貨や瓦などのやや特殊な遺物が認められました。瓦については、奈良・平安時代のものも含まれていましたが、その多くは時代をそれよりもややさかのぼる白鳳時代のものでした。

さて、これらの遺構・遺物のあり方から、調査地の平安～室町時代にかけての状況を考えますと、まず、鎌倉～室町時代（第1面）においては、井戸の存在から人々の生活の場があったものと考えられます。ただし、農作業に伴っての溝も認められることから、耕作地も広がっていたと考えられます。

そして、平安末～鎌倉時代（第2面）においては、豊嶋郡条里の区画方位と一致する溝が多く検出されたことから、調査地一帯は耕作地として利用されていたものと考えられます。

そして、平安時代中頃（第3面）においては、柱穴や井戸の存在から、当地は人々の居住域であったと考えられます。そして、ここで検出された大型の溝については、その東側で向きを北方へ屈曲させており、流水路などとは少し考えにくく、屋敷地などをとり囲む溝という可能性も考えられます。そして、ここで出土した遺物をみると、緑釉陶器や白磁などの当時の有力者層にしか所有することのできなかつたものが多くあり、また和同開珎などの銭貨もありました。このことから、第3面の遺構については、当時



大型溝(第3面)

の一般の人々が残した生活の場とは異なる性格がうかがえます。

平安時代以降、榎坂遺跡周辺においては、垂水庄や垂水西牧などの荘園が展開しており、今回検出された遺構・遺物からは、これら荘園との関連も想像されます。

なお、今回の調査では、白鳳時代の瓦を中心に、奈良・平安時代の瓦が比較的多く出土しました。当時、瓦が使用された場所は限られており、主に宮域や寺院でしかありませんでした。このことから、調査地近隣においては、白鳳～平安時代に寺院が存在した可能性も考えられ、今後の調査地周辺での発掘調査に期待されます。



緑釉陶器



瓦

吉志部瓦窯跡発掘調査の概要

吉志部瓦窯跡は平安時代初めに平安京造営の際に必要な瓦を生産した瓦窯跡です。これまでの調査では瓦窯の他に回転台跡、掘立柱建物跡、粘土採掘坑等の瓦生産に関連する工房跡が確認されています。

今回の調査は将来的な開発に対処すべく確認調査として、平成13年3月に吹田市岸部北4丁目において実施したものです。

調査では、地表下約1mの所で堅い地山の黄褐色粘土層があり、この層をベースとして落ち込みと土坑等の遺構を検出しました。

落ち込みは東西方向に展開し、南へ段を有して緩やかに傾斜するものです。検出長約2.3m、幅約0.8m、深さ約0.2mを測ります。中の堆積層は淡灰色土と淡褐色土の2層に分かれ、砂の堆積が認められないことから溝ではないと考えられます。上層の淡灰色土層から須恵器・土師器の細片が少量出土しました。

土坑は、平面形は長径約1m（推定値）、短径0.7mを測る楕円形を呈し、深さ0.45mを測ります。中の堆積土は大きく3層に分かれ、それぞれ中央部分がややくぼむような形状で堆積しています。上から3層目にくさび形の堆積土（灰白色土）が見られるなど、当遺跡で検出例のある回転台跡の状況と類似しており、これに該当すると考えられます。土坑からは遺物は出土しませんでした。これらの遺構は重複しており、そのことから土坑の方が落ち込みより古いと判断されます。遺構の形成時期は出土遺物が細片のため判然としませんが、堆積土層の層位から概ね平安時代初めで、これまで確認された吉志部瓦窯操業期の工房跡の遺構と一連のものと考えられます。

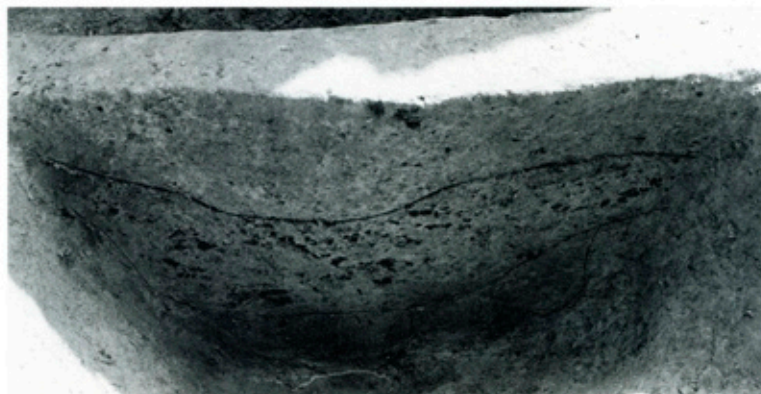


▲吉志部瓦窯跡遺構検出状況

▶土坑検出状況



▶土坑堆積土



高城遺跡第6次発掘調査の概要

高城遺跡は古墳時代、平安時代～中世の遺跡です。今回の調査は分譲住宅建築に伴う事前調査として平成13年12月に吹田市昭和町で実施したものです。

調査では、地表下約50cmの遺構面（第1次遺構面）では落ち込み1か所を、同約60cmでは遺物包含層（古墳時代）を確認しました。さらに地表下約90cmの遺構面（第2次遺構面）では落ち込み1か所、土坑1基、ピット19基を検出しました。

第1次遺構面の落ち込みは調査区の西南部に展開するものと考えられます。落ち込みの深さは約70cmを測り、その堆積層には砂層が含まれ、流水があったものと思われます。その形成された時期は、最下層の砂層から瓦器碗破片（鎌倉時代）が出土したことから、中世の所産と判断されます。

第2次遺構面の落ち込みは調査区の北東部～南東部に展開するものと思われます。落ち込みの堆積層は黒灰色系の粘質土を主体とし、深さは約50cmを測ります。土坑は平面円形を呈し、直径約110cm、深さ約50cmを測ります。急角

度に掘られた形状から素掘井戸の可能性あります。ピットは直径10～50cm、深さ10～20cmを測る小規模の穴で、どのような性格のものなのか断定はできませんが、柵列、建物跡などの可能性があります。第2次遺構面検出遺構の時期は出土土器から古墳時代の所産と考えられます。

出土遺物については、平安時代の土師器（皿）、黒色土器（碗）、中世の瓦器（碗）、土師器（皿、土鍋）、青磁（碗）、古墳時代の須恵器（杯、甕、台付鉢、器台、はそう）、土師器（甕、高杯）等の出土がありました。

以上のとおり、今回の調査で確認されたものは、中世と古墳時代の集落跡の一部と考えられます。当遺跡の古墳時代の遺構についてはこれまでに調査例がありますが、その検出遺構面の深度は地表下約60cmであり、今回の検出深度は相対的に深いといえます。高城遺跡北東外周縁部の試掘調査において地山が深く落ち込んだ状況が認められることから、今回の調査地は古墳時代集落跡の東端部に当たり、ここより東側は落ち込んで低湿地か水田であった可能性があります。



▲北側調査区遺構検出状況(西から)



▲南側調査区遺構検出状況(西から)

佐井寺焼について

吹田では古くは焼物の生産が盛んに行われていました。古墳時代には千里丘陵の南縁辺部で須恵器窯跡が数多く築かれ、大阪北部では主要な須恵器生産地でした。奈良時代には聖武朝難波宮造宮瓦窯として七尾瓦窯跡（岸部北5丁目）が、平安時代初めには平安京造宮瓦窯として吉志部瓦窯跡（岸部北4丁目）が築かれ、国の事業として瓦作りが行われました。これ以降、中世までの焼物の生産の実態は不明ですが、近世になり市内の天道（片山町4丁目）と岸部（岸部中4丁目）で瓦生産が行われたことが判明しています。近世は一般的に焼物の盛んな時代で、特に中期以降は日本各地で藩窯や私窯が成立し、多様な陶器・磁器などが生産されましたが、吹田では近世の陶磁器生産の様相は不明で、そのような中で注目されているのが近年知られるようになった佐井寺焼です。

佐井寺焼は、幕末～明治初めに佐井寺境内（佐井寺1丁目）の窯で佐井寺の医師赤井泰造によって焼かれたと伝えられる陶器です。赤井泰造については、地元出身で、弘化2（1845）年～明治6（1873）年に佐井寺で私塾である赤井塾の塾頭をし、読書、習字、算術の科目を教えたことが判明しています（『吹田市史第2巻』1975



▲佐井寺焼窯跡近景

年）。しかし、窯と陶器生産等の詳細については文献等の資料が残っておらずよくわかっていません。

市内に残る佐井寺焼の関連資料は管見では、個人所蔵の製品・採集資料（破片）等約150点、ろくろ3台（一部遺存）などがあります。そのうち、製品と採集資料は茶碗・土瓶・鍋・皿・鉢・香炉等の小型～中型の施釉陶器、窯道具等が認められます。これらの資料は大阪市難波宮跡SK790出土の19世紀中頃の陶器（『難波宮址の研究第十一』2000年）と類似しており、この時期に相当すると考えられます。このことは、佐井寺焼の中で明治5年の年号のある陶器鉢（個人蔵）があることから裏付けられます。

また、他に外底面に小判形凹印「佐井寺」銘のある陶器茶碗（個人蔵）があり、唯一「佐井寺」銘のある茶碗として注目されます。

窯跡が存在するとされる地点は佐井寺境内南端で、陶器片、窯道具の破片、焼土などが認められますが、現状では窯の構造等は不明です。

以上のように、佐井寺焼は幕末～明治初めの短期間に、小型～中型の陶器を主体に小規模に焼かれた陶器と考えられます。このような幕末～近代の私窯の研究についてはこれまで十分に行われておらず、今後の研究課題といえましょう。



▲佐井寺焼採集資料